

日本エッセイスト・クラブ

2019 冬

NO.71-II

会報

第9回応募エッセー特集



第67回 日本エッセイスト・クラブ賞受賞！

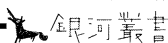


ドリアン助川 線量計と 奥の細道

22000円

「3.11」後の日本がどうなっているのか、
目と耳と足で確かめた路上の記録。
芭蕉の背中を追って、逡巡しながら、
生きる、ということを考えた日々。
書き下ろし 四六判上製 336頁

埋もれていた作品 文学の想像力



◆小沼丹 作品

不思議なシマ氏 小説集
ミス・ダニエルズの追想 随筆集
井伏さんの将棋 随筆集
ゴンゾオ叔父 小説集
各 4000 円

●最近の刊行書から

加賀乙彦 自選短編小説集
妻の死 32000円

柴田翔 中短篇集

32000円

岬

22000円

篠田正浩

卑弥呼、衆を惑わす

36000円

幻戯書房

東京都千代田区神田小川町 3-12
TEL 03-5283-3934 ※価格に税別
<http://www.genki-shobou.co.jp/>

目次

日本エッセイスト・クラブ

会報

2019 冬

題字 阿部 眞之助
表紙 よしだみどり
カット

応募エッセー特集

2

〔例会〕

現在の旅事情―旅で出会ったもの

秋山

秀一

32

相場の神々

―古代中国の富豪も説く「逆張り」

鍋島

高明

34

会員近況・事務局から

36

日本エッセイスト・クラブ定款

38

会員名

40

応募エッセー特集

会員の応募エッセー特集号です。今年で九回目となる募集企画に、十一編の作品が寄せられ、伝統あるクラブ会報初の電子版として刊行しました。来年以降も、会報冬号は電子版とし、広く社会に発信していく予定です。

題名

筆者（五十音順）

李白「白髪三千丈」

市川 桃子

ノーベル街道に出世したブリ街道

川田 志明

遠い夜の記憶

塩谷 靖子

句作三年目の楽しみ

砂原 和雄

天の朝顔

竹中 淑子

飯沼信子さんの死を悼む

当銘 貞夫

歌枕の不思議

中名生正昭

信越の秘境 秋山郷

広井 忠男

市民の公園

町田 邦雄

においの記憶

桃井 恒和

ティコティンの密書

森 美可

この企画では、できるだけ多くの会員の作品を紹介する趣旨で、二年連続の応募はご遠慮いただいています。ただし今回、編集上の都合などで二作品について例外を認めておりますので、ご了承ください。

李白「白髮三千丈」

市川 桃子

愁いのためにこのように長くなった。
明るい鏡の中の自分を見ても

いったいどこから秋の霜がこんなに頭に降ってきたのか分らない。

白髪が三千丈、なんと六キロメートル。この句のおかげで李白は、あの大げさな詩人、と呼ばれ、この句のおかげで漢詩は、あの大げさな文学、という風評被害を得た。

白髪は、どのような愁いによって、六キロメートルにもなったのだろうか。そもそも、李白はどこで、どのようにして、この句を作ったのか。

この作品は、「秋浦歌」十七首の連作の中の十五番目にある。連作中の他の作品を読みながら考えてみたい。

【明鏡】

「秋浦歌」は、長江の中流域にある秋浦という支流を船でさかのぼる途中で作られた。広々とした河。兩岸には、どこまでも続く林。林には鳥や猿の群れが跳梁し、周辺の村では村人たちの営みが続けられる。

たとえば、吹雪のように素早く飛ぶ白猿の群れ。(其五)

「秋浦歌」第十五首 李白
白髮三千丈 白髮三千丈
緣愁似箇長 愁いに縁りて箇くの似く長し
不知明鏡裏 知らず 明鏡の裏
何處得秋霜 何れの処か 秋霜を得たる

【訳】

白髪がなんと三千丈

「秋浦に白猿多く、超騰すること飛雪の若し。」

美しく広がる水。(其十二)

「水は一疋の練の如し、此の地、即ち平天。」

溶鉢炉に頬を赤く染めて、鉢山で石を砕く若者の歌。(其十四)

「爐火、天地を照らし、紅星、紫烟乱る」

このように、秋浦一带の水辺の風景や風俗が描かれている中であって、第十五首「白髪三千丈」だけが、室内のできごとを書いているとは思えない。第三句に現れる「明鏡」は、旅館で手にした銅鏡ではなく、同じところに「人は行く明鏡の中、鳥は度る屏風の裏」(「清溪行」と歌われたような、透明で人の姿を明るく映し出す水鏡である。

【愁いに縁りて】

「秋浦歌」の連作が書かれた時は、花咲く春。それなのに、第一首は、「秋浦長えに秋に似て、蕭條として人をして愁えしむ」と、歌い始める。

第四首では、ある朝突然、李白の髪はすっかり衰えて絹糸のように細く白くなった、という。

「兩鬢秋浦に入り、一朝颯として已に衰う。猿声、白髪を催し、長短、尽く糸と成る。」

好奇心にまかせて旅をしていた若いころ、望みがかなって宮中に上がった時、そのあとに年下の高適や杜甫と愉快な旅もした。そして、杜甫と別れて江南の秋浦まで来たときに、李白は自分が歳を取ったことに気が付いた。

春秋時代、斉の寧戚は身の不遇を嘆いて「白石は爛く」と歌っていた。斉の桓公はこの歌を聞いて寧戚を招いたという。第七首で、李白もその歌を歌ってみた。

「空しく白石は爛くと吟ずれば、涙は黒貂の裘に満つ」

李白はいま、地位もなく、功績もなく、空しく旅をしている。

秋浦には、雄大で珍しい景色が続く。第十首の最後の二句では、その景色にひそむ孤独が、激しく語られる。広大な風景、長大な時間の中で押しつぶされそうになっている自分は、独りぼっちの卑小な人間である。

「千千、石楠の樹。万万、女貞の林。山山、白鷺満ち、澗澗、白猿吟ず。君、秋浦に向かう莫

れ、猿声、客心を砕く。」

突然の老いの自覚、無為に過ぎた人生、孤独、これらすべてが、李白の心を砕きそうになった。

【三千丈】

船から身を乗り出して見た、澄んで明るい水。そこには、若いままの自己イメージとは違う自分の顔が映っていた。白髪が長くなびいていて、それは水の流れに乗ってさらに長く流れていく。白髪が流れていく水の行方を見れば、はるか三千丈も先まで見渡せる河の先である。

この句で李白は思う。私の白髪は、私の愁いは、流れる河の三千丈ほども長い。

【似箇】

「似箇」は「かくのごとく」と読み下す。しかし、ふつうこれは、「如此」と記すのではないか。「似箇」は当時の口語表現で、「こんなになっちゃった」という感じ。

ああ、この白髪、この孤独。手に入れたいと渴望するものがあるのに、それを求めていつも前へ前へと旅をしているのに、空しく時が過ぎて老いていくこと。それらを全てこめての「白髪三千丈」。

それなのに、李白は明るい。「愁いによってこんなに長くなっちゃった。」

いちかわ・ももこ 東京都出身。明海大学名誉教授・元東京大学講師。財団法人斯文會理事。中国唐代の詩人を中心に、中国文学や日本漢詩を研究。湯島聖堂で「李白を読む会」、毎日文化センターで「漢詩入門」の講義をしている。著書に『李白の文』『新編李白の文』『中国古典詩における植物描写の研究』『幕末漢詩人杉浦誠『梅潭詩鈔』の研究』ほか。



ノーベル街道に出世 したブリ街道

川田 志明

郷里の富山湾ではブリの回遊が多くみられ、湾のあちこちに定置網が仕掛けられるが、とくに寒中にとれる寒ブリは脂ものって美味しいとされている。湾の入り口に近い氷見の漁場でとれる寒ブリはブランドものとして全国に出荷されるほどである。

富山では、ブリは稚魚をコズクラ、やや大きくなるとフクラギ、ついでガンド、成魚をブリというように、成長するに従って名称が変わり、縁起のよい出世魚として喜ばれる。関東ではワカシ（若魚）、イナダ（鰻）、ワラサ（稚鰻）、ブリ（鰻）となり、関西ではツバイソ、ハマチ（鰻）、メジロ、ブリと出世する。

射水市の加茂神社では「鰻分け神事」という行事が昔から行われ、神様に供えたブリを切り分けて持ち帰って食べる。神様と同じものを食べることで、無病息災を祈るという習慣がある。さらに近隣では昔から、婿振り、嫁振りを見せるということで、嫁（婿）の実家から婚家へ歳暮としてブリを丸ごと一本贈るという習わしがあった。受けた方は縁起物として、その四片身を歳暮返しとして戻し、残りを親戚に配って、その振り（鰻）を披露した。一方、福岡県などでは嫁ぎ先から「嫁御鰻（よめごぶり）」といって、実家にブリを贈る習慣があるという。

ブリに成長する前の40cm大のフクラギは手頃で関東ではイナダ（鰻）、関西ではハマチ（鰻）と呼ばれ、身が引き締まっていて刺身のほか煮

ても焼いても恰好である。鰯は師走にとれ、鰯は秋にとれるからという国字らしい。

富山で用いられるフクラギの由来は定かではないが、足の「ふくらはぎ」から来ているのではと考えている。すねの後ろの筋肉が膨らんだ部分は、腓（こむら）（こぶら、ふくらはぎとも）と呼んでいるが、その筋肉が突っ張る「こむら返り」は正式には腓腹筋痙攣と呼ばれ、冷えや疲労、脱水が誘因とされている。腓にはすでにヒラメ筋という正式の解剖名もあることから、魚のフクラギも形から足の「ふくらはぎ」からきたのではと思っている。

江戸時代から終戦前までは、飛騨・信州にとって「ブリ街道」の役割は大変なものだったようだ。富山湾で上がったブリは「越中ブリ」として牛の背に揺られて雪の飛騨街道を越えて高山に入って「飛騨ブリ」と名前を変え、さらに重い荷を担ぐ歩荷（ぼっか）の背で野麦峠を越えて松本から信州の広い地域に運ばれた。当時から松本地方ではブリを持って年越しを祝う習慣があり、山中深くでもブリはご馳走として貴重品扱いされていたらしい。さて、時代は変わ

って、これまでの日本人のノーベル賞受賞者は12名になるが、なんと内4名（田中耕一（化学）、小柴昌俊（物理）、利根川進（医学・生理学）、それに白川英樹（化学賞）の諸氏）がこの国道41号線で富山から高山までの90kmの飛騨街道沿線に深い縁があつて、国際的な出世街道の様相を呈している。そこで自然と、ブリ街道ならぬ「ノーベル街道」と呼ぶようになった。

出世魚のブリ街道には関係のない、単なる偶然と思うけれども、3000m級の立山連峰を仰ぐ越中、さらには飛騨地方は雪に埋もれる厳しさの中にも美しく豊かな自然と文化を育んでおり、こうした人の心を豊かにしてくれる環境が創造的な発想を育む土壌となり、ノーベル賞に繋がったのではないだろうか。

かわだ・しあき 北方領土の歯舞群島の中の志発島で生まれ、戦後は射水市の富山湾岸で育つ。高校の機械科から慶大医学部に進み、心臓血管外科を専攻。慶大名誉教授となり、山中湖クリニックで日本初の会員制PET検診に携わっている。月刊教養誌「新潮45」にコラム「鬼

手仏心」を2年間連載。日本エッセイスト・クラブ会員。

遠い夜の記憶

塩谷

靖子

あれは37年前の、底冷えのする夕方のことだった。そのとき、私たち家族が「保育園のおじさん」と呼んでいたその人が初めて我が家へ上がってきたのだった。4年近くも2人の子供た

ちをかわいがってくれていたのだが、その間、いくら誘っても家に入ろうとしなかった。そのときも「いえいえ、私のようなものがお邪魔しては……」と言って、玄関前で帰ろうとした。丁度そのとき夫が帰ってきて、「寒いですから、どうぞ上がってください」と何度も誘ったこともあり、その人は遠慮しながら家へ上がってきた。そして、誰にも打ち明けたことのないという事実をその人から聞かされたのだった。

その人は、戦前・戦後を通じて活躍し、日本人なら誰でも知っている作曲家・古関裕而の従兄弟だというのだ。「私は飲んだくれで金銭的にも迷惑をかけたので、あの一族の中にいられなくなって、それから、ずっとこんな生活をしているんです」と言った。そして、その夜以降、私たちはその人に会うことはなかった。それから間もなく、私たちは引越すことになったからだ。

その人は、娘と息子が通っていた保育園の近くの施設で暮らしていた。施設にはホームレスだった人たちがいて、そこから日雇いの仕事に出ていた。その人にひと言お別れを言いたいと

思い、施設の職員に聞いたが、彼の所在はすぐには分からず、そのまま引越すことになってしまった。4年間も優しく声をかけてくれた人にお礼一つ言わずに別れたことを、今でも後悔している。

全盲の私には分からなかったが、彼はホームレス風の身なりをしていたらしく、道ゆく人たちからは何となく敬遠されていた。彼は、私が子供たちを連れて歩いているときに話しかけてきた。マーケットからの帰りだったり、公園へ遊びに行く途中だったりした。どこからともなく、ひよっこり現れては優しく声をかけ、子供たちにお菓子をくれた。話の内容はどうということもないものだったが、それでも、かなりの教養人であることがはししに感じられた。彼は、施設の職員から「古関さん」と呼ばれていた。私は、「古関なんて、古関裕而くらいしか知らないけど、珍しい名前だなあ」くらいに思っていた。古関裕而の従兄弟だと知っていたら、もっといろんなことを聞きたかったのにと、今でも残念に思っている。この話をする、「古関裕而の従兄弟って本当なのかな？」と疑う人も

いたが、私は本当だと思っている。なぜなら、有名人の名前を語ることで自慢したいのであれば、何年間も誰にも言わずにいるわけがないからだ。

明治40年生まれの私の父は、古関裕而より2歳年上で、彼の歌をよく口ずさんでいた。子供の頃からそれを聞いていた私は、その気品と哀感に満ちた歌が好きになっていった。私が小学2年生のときに始まったラジオドラマ「君の名は」に出てくる名曲をはじめ、神秘に満ちた「サロマ湖の歌」、重厚な響きの「白鳥の歌」、爽やかで軽快な「あこがれの郵便馬車」や「高原列車は行く」など。今でも、古関裕而の歌を聞くと、在りし日の父の声と古関さんのことが思い出される。

37年前のあの夜以来、「保育園のおじさん、どうしてるかな?」「こっちの連絡先くらい教えておけばよかったね」などと、時々、夫や子供たちと話していた。やがて子供たちも家を出てゆき、夫も5年前に亡くなった。古関さんのことを話す相手がいなくなると、古関さんを思い出すこともめっきり減った。先日、ある人に誘

われてなつメロを歌う会に出席したところ、古関裕而の作品をはじめ、懐かしい歌が次々と歌われるのを聞くことができた。私も「長崎の鐘」を歌った。そうしているうちに、古関さんのことが一気に思い出されてきた。あの寒い夜、私のピアノに合わせて古関さんも「長崎の鐘」を歌った。積もり積もった思いが溢れてきたらしく、彼は途中で何度も声を詰まらせたのだった。

最近、彼が暮らしていた目黒区大橋にある施設「愛隣会」に問い合わせてみたが、経営者も変わり、名簿も残っていないとのことだった。せめて下の名前だけでも聞いておけばよかった、そうすれば親子でお墓参りくらいできたかもしれないのにと、また後悔している。

来年は、古関裕而夫妻をモデルにした「エール」が、NHKの朝ドラで放映される。そこで、古関さんの片鱗でも見ることでできればと期待しているのだが……。

しおのや・のぶこ 声楽家。筑波大学附属盲学校を経て、東京女子大学文理学部数理学科卒業。「奏樂堂日本歌曲コンクール」入選、「カン

ツォーネコンコルソ」クラシック部門第1位、「全日本ソリストコンテスト」入賞、他。CDに『慕わしき面影』他。多数の演奏会に出演。エッセイストとしても活動。「小諸・藤村文学賞」入選。日経新聞文化欄に作品が掲載。著書に、第58回日本エッセイスト・クラブ賞最終候補作『寄り道人生で拾ったもの』（小学館）。



句作三年目の楽しみ

砂原 和雄

カサブランカ香り聞かむと窓展く

書斎の前の小さな庭の片隅に植えたカサブランカが今年も大きな花を咲かせた。カサブランカの楽しみは豪華な花の美しさもさることながらその香りにある。香りは花の咲きだすころ、早朝の空気の澄んだいっときより強く放される。「今日は咲いているかな」と期待を込めて窓

を展いたとき、その香りが聞けたときの喜びは格別である。

月一回の句会に参加するようになって三年目。提出する五句も前日までにできるようになり、句会に出るのが楽しくなった。参加者は選者と十人余り。まだまだ季語の誤りや仮名遣いなど指摘されることが多く、一句でもすんなり選ばれるとうれしくなる。ともあれ何事も研鑽を積むことが大切と歳時記を繙き散歩に出かけるときはメモ帳を忘れず、何か気付いたときはすぐメモするよう心掛けている。

このところ時季のうつろいへの関心は深まってきた。夏に公園を歩いたときには、池の淵に咲く半夏生は雨上がりに白さを増していることに気付き、また樹木を揺るがす風の音の中にひとときわ澄んだ小鳥の鳴き声を聞き、「あっ、鶯だ」と口笛を吹いた。道端の草花は日々成長しており、じつと見つめていると何かを語りかけてくるような気分ひたり、ふと百合の花が好きだった亡き妻を想いだしたり、故郷の野山を重ねてみたりした。

口笛吹けば鶯応へ呉れ

亡き妻の残した聖書百合の花

朝顔の赤、青、白と窓飾り

鈴の音の聞こゆる如き花馬酔木

ゴヤ描く「ペトロの悔悛」春日差す

こほろぎの鳴いてしずかや本開く

自作の句を並べてみると、ふと浮かんだその時々を感じとか感想を綴ったもののようで物足りない。魂というか、自分の心の声が俳句にこもっていないからだと思われる。何故だろうと、いくつかの俳句に関する本や文章を拾い読みした。

「俳句は、自然を詠む客観写生が基本」であり、「季題（季語）を用いた写生であるべきで、主観を書くのは違う」という。

若いころ教えを受けた佐藤春夫は初対面のと き「小説は何をどう書いてもよいが、自分でないと書けないものを書け」と告げられた。「何をどう書いてもよい」という言葉を受けて、小説ではフィクションを交えた物語を書いてきた。俳句ではこうした考えはタブーである。

俳句は自然を客観的に詠むことで「季題と自分一つになる」。すると「その客観描写を透し

て主観が浸透して出てくる」。俳句は季題を持ち、五、七、五と言葉が短い。自分の目で見、自分が体験したことを俳句にするには「どこまでも客観写生の技倆を磨く必要がある」という。また、「心が自分を離れて果てしない時空をさまよう。そうしたときに心は言葉と出会い、俳句が誕生する」ともいう。

要は自分の目でよく見て客観写生の技倆を磨くことだと納得した。まずは名句を多く読み、技倆を磨くのは句会である。「俳句は季節の挨拶」（高浜虚子）という。友人知人に季節の俳句で挨拶したいものだと思う。

佐藤春夫から俳句の話を聞いていないが、七歳のときはじめて俳句を口ずさんだといわれ、『能火野十七音詩抄』（佐藤春夫全集第一巻・講談社版）に多くの名句がある。

行く春や女神は老いず二千年

この句はミロのヴィーナスを見ての作品のひとつで、亡くなる日の午前中に詠んだといわれる。全集の巻末で島田謹二は『十七音詩抄』によつて、最後に老年の童心——彼のいわゆる「老魂」にまで戻っていった」と述べている。

いやはや、三年くらい句会に参加したかとい
って名句ができるわけではない。研鑽、研鑽、研
鑽あるのみである。

すなはら・かずお 1938年岐阜県飛騨市
生まれ。上京してまもなく佐藤春夫に出会い、
学生のころ度々訪問する。産経新聞論説委員、
明海大学講師を経て、文筆活動に専念。著書に
『炎の森へ』（日本経済新聞出版）、『日本銀行物
語』（泰流社）、『ザ・バンク』（産経新聞社）、近
著に『魂の刻』（静人舎）など。年末に新しい小
説『夢、遙か』を上梓する予定。



天の朝顔

竹中 淑子

『宇宙はほんとうに一つなのか』、『虚数時間の
宇宙』、『インフレーション宇宙』などなど、し
ろうとにもわかるように書かれた宇宙に関する
科学書を獺祭の茵だっさいしとねに怠惰をきめこんでいる昨今
である。

うれしいことに、宇宙飛行士山崎直子さんが
宇宙に持って行った朝顔の種三粒を友人から贈

られた。「宇宙のダメージがあるかもしれないよ」と言っている。

「宇宙(天)を旅した朝顔の子孫」、略して「天の朝顔」の三粒の種は黒光りしていて黒ダイヤのように貴重品に思われる。生育に自信のない私は一粒は次年度用に保存し、二粒を一粒ずつ別々の植木鉢に蒔いた。

宇宙とは文字通り広大無辺である。ただ山崎さんの行った国際宇宙センター(ISS)は、地球からわずか四〇〇キロメートルの所にある。地球を果物の桃にみなせば、その位置は桃の皮の上といったところ。ところが宇宙の距離は学校でも習ったようにキロでは無理で光年で表される(一光年は十兆キロメートルほど)。しかも時代と共に宇宙の認識範囲は拡大している。一〇〇年程前までは天の河銀河までだったのが、今や一三七億光年まで、さらに光速よりはやく宇宙は膨張しているとかで、四〇〇億光年までも広がっているという。

一三七億光年の宇宙創成のストーリーにでてくる時間の遅れや虚数時間の反転などを、友人の言う宇宙のダメージにあてはめるのはいささ

か無理があるかと思うが、そこは妄想のたのしみである。私の「天の朝顔」にも時間の間延びがあったり、時間の矢の反転で、芽が出る前に花が咲き、花の咲く前に実が成るということもあるいはあるかもしれない。

そんなことを思いながら、種を蒔いてから待つこと二週間、片方の植木鉢の土から小さな双葉がでて蔓がのび蕾がでて、ある朝、みごとな花が一つ、太陽の光を蒐めて咲いたのだった。

花の色は青みがかった紫、タンザナイトの紫といったところ。この「天の朝顔」は地球モードに戻り、地球の植物の理にしたがったのだろう。

残念なことに、夕闇が迫り、群青色の空が漆黒の闇に変わる頃には、花は萎れてしまう。天上にはこの季節、天の河をはさんで琴座のベガと鷲座のアルタイが輝き、さらにこれらと三角形をなすように白鳥座のデネブが見られるだろうに……。この夜の天を見ずに凋んでしまうというのではなんとも悲しいではないか。夕暮に花咲く夕顔なら見上げることができるのと思う。

と、若い時に読んだ『天の夕顔』という小説に思いが至った。中河与一の浪漫主義文学の名

作といわれる小説である。天の国に行った女人に、かつてその人が若々しい手で摘んだ夕顔の花を青く暗い夜空にむかつて華やかな花火として打ち上げるといふ場面がある。当時の私は、これぞ小説の描き得る人の世のロマンだといたく感激したものだ。今ではさらに宇宙へのロマンが加わり、私の『天の朝顔』を天に返してやりたい気分にもなる。では、どうやって？ 子供の頃作った三段式ロケットで打ち上げる？ 白鳥座行きの銀河鉄道に乗せる？

さて、私のもう一方の『天の朝顔』の鉢の種は発芽せず、未だに何の変化も起きない。種は消滅し無に帰したのだろうか。種を置いたあたりの土を掘り返してみたい気もしないではないが、そんな事はしない。おそらくは宇宙モードを保っているだろうこちらの『天の朝顔』は、そのうちに宇宙のダメージである思いも及ばない奇妙な現象を呈して驚かしてくれるのではないだろうか。

こうして、今は、『天の朝顔』を介して、宇宙創成、遥かなる宇宙の果てに、さらなる思いを馳せることができる。

これぞ、宇宙へのロマンであろう。

たけなか・よしこ 福岡県生まれ。九州大学理学部数学科卒。慶應義塾大学名誉教授。理学博士。著書に『数学からの七つのトピックス』（培風館）、『漢詩を詠む日々』（慶應義塾大学出版会）、『数学者の家』（西田書店）など。



飯沼信子さんの死を 悼む

当銘 貞夫

在米のノンフィクション作家で日本エッセイスト・クラブ会員でもあった飯沼信子さんが昨年秋、他界された、享年87歳。飯沼さんは1932年静岡県沼津市生まれ、53年高知県出身の飯沼星光氏と結婚後渡米。南カリフォルニア滞在中に「野口英世とメリー・ダークス」、「高

峰譲吉とキャロライン・ヒッチ」、「松平忠厚とカリ・サン普森」、「長井長義とテレーゼ・シューマッハ」、「鈴木大拙とベアトリス・レイン」など、黎明期に日本を背負った男たちと異国の妻の物語を書いて、06年日本政府より旭日単光章を受章された。毎年、日本で講演などの活動も行っていた。

私も2008年、日本エッセイスト・クラブ会員になったが、会員に推薦してくれたのが飯沼さんだった。「アメリカでのクラブ会員であることを強く胸に抱いて、もっと尽力してほしい」と口癖のように言われ、厳しかった姿が思い出されて胸が熱くなる。

飯沼さんは、野口英世について執筆したことから、福島県出身の大日本農会南カリフォルニア支部長小山信吉さんとも親しかった。茶道裏千家の教授でもあった飯沼さん主宰の教室に、小山さんの母親が自宅の一室を提供したりしていた。その小山さんから、飯沼さんが「当銘は日米友好親善に貢献しているので何らかの賞に推薦してほしい」と願っていたと、後に聞いた。私は「2018年度大日本農会緑白綬有功

章」を授かったのだが、それも飯沼さんの力添えのおかげだったことを知り、涙が出た。

ご主人の飯沼星光さんは「信子は執筆に生涯を捧げただけでなく、茶道でもロサンゼルスやラスベガスに教室を持ち、日本文化の普及に貢献しました」と語る。さらに飯沼さんはご主人と協力、幕末維新の志士たちの偉業をしのぶ「ロサンゼルス龍馬会」を創立、運営していた。そして、龍馬の生涯をテーマにした作品を構想、その執筆途中の死だった。

とうめ・さだお 1941年沖縄県生まれ、高校卒業後東京に10年滞在、69年11月ロサンゼルスへ渡る。グレンデールカレッジ卒業。その後永住権及びアメリカ市民権を獲得、2005年、6年に北米沖縄県人会会長、14年に日本全国38県人会が加盟する南カリフォルニア県人会協議会会長を歴任。19年に大日本農会（秋篠宮文仁殿下総裁）緑白綬有功章を受章。1998年以来沖縄の新聞琉球新報のロサンゼルス通信員。カリフォルニア州チノヒルズ在住。

歌枕の不思議

中名生 正昭

宮中での喧嘩

京の都、宮中のことであつた。左近衛中将・藤原実方（さねかた）は権大納言の藤原行成と口論し、行成の冠を奪い庭に投げ捨てた。正暦五年（九九四年）のことである。

「歌枕見てまいれ」

これを御簾（みす）の中から見ていた一條天

皇は実方に「歌枕（うたまくら）見てまいれ」といった。これは左近衛中将から陸奥守への左遷を意味する。乱暴を罰するとともに風流心を養えということであろう。

百人一首対三蹟

時は平安初期、「かくとだに えやはいぶきのさしも草 さしもしらじな もゆる思ひを」と詠んだ実方の歌は『後拾遺集』に収録され『小倉百人一首』にも載せられ名高い。その実方に「歌枕見てまいれ」とはどういう意味があったのか。

喧嘩相手の藤原行成（九七二―一〇二七）は、位階が上であるばかりでなく、小野道風、藤原佐理と並ぶ「三蹟」の一人とされる名筆家であった。喧嘩の相手が悪かった。しかし二人は極めて近い同族だった。

年下の同族への気安さか

実方も行成も、藤原鎌足の孫である房前を祖とする藤原北家の流れで六代の子孫・忠平を共通の祖とする。忠平の子・師輔の曾孫が行成で、師輔の弟・師尹の孫が実方であり、行成は実方の従兄弟の子に当たる。本家筋であっても、実

方から見れば甥のような感じであったろう。

口論の末、粗暴な態度に出たのも分からないではないが、場所は宮中、天皇の真近かで起きた事で事実上の降格処分もやむをえなかった。

三年後に歿した実方

陸奥守へ左遷された実方は、翌長徳元年（九五五年）陸奥国に赴任、再び都に戻ることなく、同四年（九九九年）任地で歿した。

実方の亡くなった時の事として、国守として領内を馬に乗り巡視中に道祖神の祠の前にさしかかった時、部下が下馬するように進言したが、実方が「このような、いかがわしい神の前で下馬する必要はない」と無視し通り過ぎようとしたところ、馬が棒立ちとなつて、実方は落馬し、死亡したという説話がある。

女性に人気のあった実方

都にあった時の実方は、『枕草子』の筆者である清少納言とも親しく、女性にも人気があった。

歌枕はなぜ陸奥なのか

ここで疑問がある。なぜ歌枕と陸奥（みちのく）が結び付くのか。

歌枕とは、古歌にうたわれた諸国の名所を指す。当然ながら都の周辺に多く、遠く離れた陸奥（みちのく）には少ない。陸奥の歌枕を挙げると、雄島、末の松山、しのぶ（信夫）と、異論はあるが、野田の玉川、沖の石ぐらいである。

それなのに歌枕イコール陸奥（みちのく）というには、次の実例を挙げねばなるまい。

第一は都にいた源融（みなもとのおさむ）が邸宅に塩竈を築き、みちのくに思いをはせた事である。源融（八二二―八九五）は嵯峨天皇の子で、臣籍に移り従一位・左大臣となり「みちのくのしものぶもじずり たれゆえに 乱れそめにし われならなくに」と詠んだ歌が「百人一首」にある。

松島を意味する歌枕群

このように陸奥の歌枕は数は少なくても粒よりで、とくに「雄島」は松島、千賀の浦、塩竈の同意語、または包括語として扱われ、歌枕の随一といつてよく、松島を意味する歌枕群が、歌枕といえはイコール陸奥（みちのく）を象徴することに繋がっているのだと思う。

一條天皇が、実方に「歌枕見てまいれ」といった言葉の意味が改めてはつきりとする。

芭蕉が断念した「塚詣で」

七百年後の一六九四年（元禄二年）五月、奥の細道の旅をした俳人松尾芭蕉は、仙台へ向かう直前、悲運の中で歿した「藤中将実方の塚」を訪れようとして折からの五月雨の悪路で断念した。もし詣でることができたなら『おくのほそ道』に1ページが加えられたかもしれない。

なかのみよう・まさあき 一九二七年仙台市

生まれ。東北大法学部卒。読売新聞編集局参与、局長待遇職の経営計画委員会幹事代表、総合技術開発室長、編集委員を歴任。日本ジャーナリスト懇話会会長（現顧問）。著書に『歴史を見なおす東北からの視点』（かんき出版）など多数。

信越の秘境 秋山郷

広井 忠男

新潟県津南町と長野県栄村の間、中津川溪谷沿いの約二十キロメートルに山村が点在する。苗場山、烏甲山等二千メートル超の山々が囲み、谷は深く冬の雪も多大である。明治半ばまで米は一粒も取れなかった。江戸時代後期の打ち続く大飢饉で四ヶ村の住民、老若男女全員が死に絶えた。今、林の中の村跡に墓や石仏のみが山

風に立つ。夏でも背筋が凍る思いである。令和元年八月、秋山郷自然塾が開かれ数十人が一泊二日で参加をした。信越の両町村が主催をし、関東からも多く参加をした。大学教授、研究者の講義もあった。

テーマは焼畑農耕と食であった。山肌の野草を鎌で刈り、乾燥したら着火し灰も一緒に耕して畑とする。越後の山村ではお盆あけの晩夏に多く行う。野草に勢い、栄養がある。

焼畑にはそば、大根、白菜等短期に実る秋野菜を作り、冬にむけての食料とする。この農耕は世界の多くの民族が行っている。食料不足の秋山郷ではこれを春にもやった。春はまだ野草が伸びていない。晩秋に山の雑木を切り、これを春までに乾燥させる。干草の代りに着火し焼畑とする。八三歳の秋山の長老は語る。春に焼畑を行い食料を手になしないと食が続きませんでした。秋まで待てなかったのです、と――。木材資源は逆に極めて豊富である。極地のように閉じこめられる長い冬は柱程もある木呂(ころも)を一間四方程の囲炉裏に何本も焚く。家中の暖房、灯り、煮炊き、団欒の全ての元であった。

昨今巨木を倒しテーブル、こね鉢、家具調度品を特産物として販売している。

かつては木の杓子、除雪用具、お椀等を長い冬場に作り、雪消えと共に近隣の町村に売りに行った。溪流の魚、イワナ、ヤマメ、鱒類は大きく豊富である。焼魚にし、背中一杯に背負い、二泊三日の山越えをして上州の草津温泉にまで売りに行った。数少ない現金収入とした。北東北の秋田マタギ衆が冬山を歩き続けて秋山にまで到った。この地に土着し狩猟方法を伝えた。

「熊もカモシカも鳥、魚、山菜、木材、山の幸は全て大自然、山の恵みです」と感謝を常に忘れない。多くの貴重な習俗が遺る。食では郷土料理であり飢餓食である早そばを作り、食した。細切り大根、刻み葱の薬味を入れ、かつてはすり味噌のタレで食した。江戸のベストセラー「北越雪譜」を著した鈴木牧之も訪れ、「秋山紀行」を上梓した。打ち続く秘境の大飢饉時、救済に手を差し伸べた義の富商がいた。現小千谷市片貝町地主兼薬酒商の佐藤佐平治家であった。平素使用人は無論家人は極めて慎ましく暮らし、貯えた財は惜しみなく天災時に放出した義家と

して一円に知られていた。秋山郷に合計米粃、稗千二百俵余を与えた。秋山の人達は片貝村まで六十キロの道を往復四日かかりで、一人約十貫匁（三七キロ）背負い、命の食（かて）として運んだ。

米が作れないということは藁がない。草鞋も作れないので裸足で雪道を進んだ。これを目にした沿線の真人（まっと）村々民は同情し、一千足の草鞋を贈った。佐藤佐平治家はさらに五十両（現在の一千万〜二千万）を求めに應じて貸し与えた。返済のメドは全く立たない。そこでこの五十両を自分が村から借りたことにした。七分、三兩一分の利子を自分が毎年払い続けた。昭和四十二年まで利子は払い続けられ、一三五年間、一億円余の金額となった。

佐藤家の資金で石垣田を造成、どうにか米が口に入るようになったのは明治中期であった。大飢饉で日本中で六十万人が餓死した時代であった。結束（けつとう）村では神社に佐藤家顕彰と感謝の石碑を建てた。毎年秋には佐平治祭りが催される。子供達用の紙芝居になって伝えられ、映画化案もあった。自然塾で秋山郷で生

きた厳しき、佐平治翁の義拳が再確認された。
民宿に泊り川の幸、山の幸を頂いた。夜には秋
山郷の踊りと唄も披露された。兵役召集には四
十八時間以内の入営が国民に課せられていた時
代、間に合わない秘境であつた。

満天の星は美しい。がその下に生きた郷民の
闘いと命は語らないと不明である。

ひろい・ただお 早稲田大卒。第68代新潟県
議会副議長。全国木喰研究会々長。著書に「螢
になった特攻兵〈宮川三郎物語〉」「野に生きる
仏 木喰上人」「耐える鋼鉄 第三十六代横綱
羽黒山物語」ほか。



市民の公園

町田 邦雄

武蔵野中央公園は我が家から歩いて五分ほど
の距離にある都立の公園である。

面積十万平方米。その大部分は広い緑の芝生
で、その外側を森が囲み、森の下道路が公園
の外縁を一周している。私は週に二、三回、公
園に出かけ、公園の外側を一周することを心掛
けている。膝の手術をしてからは一時歩くこと

に不自由をしていたが、かなり回復し、杖を突きながらでも歩けるようになったのが嬉しい。

この公園の魅力は何と言っても、ゴルフ場の様に、広々とした緑の芝生である。模型飛行機の大会が開かれたり、凧揚げ合戦の会場になったりするものも、これだけの広さのお蔭だろう。普段は、市民達は家族連れで来て弁当を広げたり、フリスビーをやったりして芝生の上の生活を楽しんでいる。

公園の外側を一周する道路で、多いのは、私のように、一生懸命歩いている老人、犬を散歩させているご婦人、一番多いのはランニング姿で走る若者達だ。いや走っているのは若者ばかりではない。中高年の男女もそれぞれのスタイルでジョギングを楽しんでいる。あれは昭和四十年ころの話だが、初めてアメリカへ出張し、ニューヨークのセントラルパークへ行った時、公園の中を走る沢山のアメリカ人の姿に、びっくりしたことを思い出す。その頃の日本では、公園を走る市民の姿は珍しかったからである。いや、走れるような公園がなかったからだろう。日比谷公園だって、有栖川公園だって、走れる

公園ではない。

そういえば、公園というのは市民社会の産物である、封建時代には公園は無かった。「きれいなお庭」はあったけれど、それは大名の庭園やお寺の境内などであって、偉い人が見て楽しむものだった。京都あたりへ行けばよく見られる日本庭園には、池、築山、石と灌木などが配置され、独特の美しさはあるが、鑑賞する楽しみはあるものの、参加する喜びはない。セントラルパークで走る市民を見て、公園とは市民が参加するところだと思っただけで、多くの日本の公園にその要素が比較的少ないのは、封建時代の大名や金持ちの庭園を引き継いだものが多かったからなのだろうか。では、この公園の生い立ちはどうなのか。公園の一郭に「武蔵野中央公園の歴史」という題で銅版の表示がある。曰く

「この地はかつて小櫓や櫓、野草などの生い茂る武蔵野台地の一角で、緑の美しい畑地であった。」

「昭和十三年、中島飛行機株式会社がこの公園敷地を含む広大な畑地に大きな工場を建設した

為、時代の荒波にまきこまれることになった。」

「中島飛行機は太平洋戦争中、ゼロ戦など陸海軍機のエンジンを生産する国内随一の航空機メーカーであったため、米軍機の最大の標的となり、昭和十九年十一月以来、九回にわたる空襲を受け、工場だけでも二百二十名の犠牲者を出し、工場も殆ど灰燼に帰した。」

「終戦を迎え、工場の跡地に米軍宿舎グリーンパークが建設され、昭和二十八年十一月まで、米軍将校とその家族七百六十所帯が入居した。」

「その後の返還運動により、昭和四十八年七月返還が実現、東京都はこの地を都市計画公園として整備することを決定した。整備に当たっては『はらっぱ公園』として親しまれる公園をめざし、昭和五十三年全面開放となった。」

「こうして半世紀にわたる激動の時代を経て、昔をしのばせる緑の原っぱが誕生したのである。」

この公園の成り立ちには、並々ならぬ歴史があった。この穏やかな土地の上に、嘗てB29の爆弾が降り注いだのだとは考えにくい。グリ

ーンパークという米軍宿舎の返還運動も成功するまでには多くの苦労があったであろう。そのことを思い出す人々も少なくなった。苦労しただけに、新たに獲得したこの地を、市民のものにしたいという熱意も強かったであろう。『原っぱ公園』というイメージは昔の武蔵野の緑の畑地の面影を取り戻したいという思いが込められている。今や住宅地の真ん中にある公園だが、市民達は憩を求めてかなり遠くから、この原っぱ公園にやってくる。

マンションの十一階にある我が家の窓からこの公園の四季の移り変わりがよく見える。毎朝、公園の緑を見て一日が始まる。

まちだ・くにお 昭和5年生まれ。少年時代を上海、満洲で過ごす。一橋大学卒。昭和28年電電公社入社。日本自動車電話取締役、N T T ドコモ常務取締役、ドコモサービス代表取締役社長など歴任。K E G（木村治美エッセイストグループ）所属。著書に『これまでは人のことかと思いにしに』、『続これまでは人のことかと思

いしに『、『続続これまでは人のことかと思いに』など。

においの記憶

桃井

恒和

人気の給食はいつの時代もカレーライスと小
学校の先生から聞いて、そうだろうなと納得し
ながら、米飯給食よりはるか昔に家で作ってい
た懐かしいカレーのにおいを思い出した。野菜

や肉の中に入ればあつという間にカレーが出
来上がる便利な市販のルーなどなかったから、
母親は小麦粉とカレー粉をフライパンで混ぜ合
わせるところから始め、熱が通り出すと、薄暗
い台所から香ばしいにおいが漂ってくる。手の
かかるこのプロセスこそ、子供心には、きょう
はカレーだと待ち遠しい至福の時間だった。

苦手なおいも一方であつた。たとえば、父
の膝に抱かれるときのおい。たばこのヤニの
においが服や体に染みついていた。それに私は
遅い子だったから、小学校へ入るころ父はすで
に五十歳を超えていて、今で言う加齢臭もあつ
たのだろう。それらが混ざり合ったにおいを私
は好きになれず、父に抱かれそうになると無意
識に身を固くした。

もう一つ苦手だったのは、ルーツを朝鮮半島
に持つ同級生が近くに来るたびに感じたニンニ
クのおいだ。小学校は横浜の落ち着いた住宅
地にあつたが、校庭の横にはそれとまるで違う
朝鮮半島出身者たちの壊れかけたバラックが連
なっていて、そこに住む子がどのクラスにもい
た。口からは強いニンニク臭がし、粗暴な男子

が多かった。

そんな一人「金」という同級生のことを、今年出した『使うあてのない名刺』というエッセー集の中でちよつと触れた。怒り出すと目が血走る彼は女子いじめもしてみんなから嫌われていたが、中学生になった彼が大きな新聞の束を抱えて市電に飛び乗り、また脇目もふらず降りてゆく姿をいじめられた女性が目撃して、「家計を助けるためいつもこんなふうに頑張ってたんだ」と初めて気づいた、と後年話すのを聞き、自分たちがあのころ持っていた故なき差別意識への懺悔の思いを字にしたのだ。

それがきっかけで彼のことが、同学年だった二十人ほどが集う酒の席でも話題に上った。同じクラスになったことのない者も、イガグリ頭に乱くい歯の「金」のことはよく憶えていて、彼にまつわる記憶をそれぞれ口にした。

海産物の仲卸から還暦を過ぎて神主に転身した同級生は、中学へ入ってすぐの、今も忘れられないという光景を語った。

学生服は名札を胸につけるのが決まりだったが、「金」の胸にはなかった。「何でつけてない

んだ」と教師からクラス全員の前で叱責された彼は、ポケットから「金」ではなく日本ふうの通名の書かれた名札を取り出した。すると教師は「それはお前の本当の名前じゃないだろ」と耳を疑うような言葉で追い討ちをかけ、彼は泣きそうな顔になって名札を裏返したという。そこには「金」の一字があった。

神主氏は、この話で座が重くなったと感じたらしく、続けて「彼らがあそこに住んでいたのはわけがあるんだ」と、地元の旧家の当主である知人から以前聞いたエピソードを明かした。昭和三十年代に知人の父親が亡くなったときのこと。見知らぬ朝鮮の人たちがたくさん葬式に来て、父とどういう関係かと問うと、過去にこんなことが、と教えられたという。

この地区では大正時代後半、市電の延伸工事が朝鮮人を使って行われていた。そこへ関東大震災が起きて朝鮮人暴動のデマが飛び、彼らは逆に身の危険を感じて逃げ惑った。それをかくまい助けたのが、知人の父親ら地元の日本人たち。四十年近くたって、その恩を彼らは忘れず、最後のお別れに來たのだった。

「金」の父や祖父が、助けられた中にいたかどうかはわからない。それでも皆、この逸話で少し救われた気がした。

後日、私は思い立って、電車とバスを乗り継ぎ母校の周りを何十年ぶりで訪ねた。かつて「金」のバラックの家があったあたりには、瀟洒な二階建て住宅が並んでいた。彼はここを離れてからの長い道のりを、名札の裏と表どちらの名前で歩んだのだろう。

苦手だった記憶の中のあのにおいは、もうどこにもなかった。

ももい・つねかず 1946年、横浜市生まれ。70年に読売新聞社に入り、社会部長、東京本社執行役員総務局長などを経て、2004年から16年まで読売巨人軍の社長、会長。著書に『スコアブックの余白』『使うあてのない名刺』（いずれも中央公論新社）がある。

ティコティンの密書

森 美可

私が若いころ、近所に子どもものいない夫婦がいた。おじさん、おばさんは話し好きで、遊びに行くとき歓迎してくれた。

ある日、いつものように訪ねてゆくと、おじさんが茶の間に座ってため息をついていた。

「どうしたの？」

「どうもこうもない。チコチンが日本に来たん

だ。帝国ホテルに呼び出されて会ってきた」。

「誰？その人」

「戦前の知り合いさ。ユダヤ人で、骨董品の売買をしていたころ知り合った」

おじさんは問わず語りに話し出した。その昔、チコチンのたつての依頼でシベリア鉄道に乗ってベルリンまで行ったそうだ。手紙を知人に届けてくれれば、往復の旅費、一週間のベルリン滞在費、謝礼を弾むという。

「しかし、それは危険な仕事で、見つければ大変なことになる」

話がそこまできると、台所にいたおばさんが顔を出して、「あなた、でたらめな話をするんじゃないのよ」といって、おじさんに目線で合図した。

別の日にはおじさんからシベリア鉄道の旅の話聞いたことがある。えんえんと原野が続き、毎日同じ風景ばかり。それがうんざりするユーラシア大陸の素顔だというのだ。時々停車して、そのまま半日も動かない。人家のない唐黍畑の果てから人々が湧いて出て、饅頭や食い物売りに来る。列車には食堂車も図書館も散歩用車

両もあったが、一か月も乗り続けていると死ぬほど退屈する。やつとモスクワあたりから景色に変化が出てきた、とおじさんはそんなことを語ってくれた。

ところで最近、イスラエルを旅行した友人がこんなことを言った。

「あちらには素晴らしいティコティンという日本美術館があるのよ」

「えっ、今なんて言った？チコチン？」

「ティコティン美術館よ。ビジネスで成功したティコティン氏が作った美術館で、昔、仕事で日本に来るたびに美術品をコレクションしたそうよ」

後日、友人がくだんの美術館のカタログを送ってくれた。見事なコレクションだった。

カタログなどの資料によると、このコレクションの主、フェリックス・ティコティン氏（一八九三—一九八六）は、戦前から貴重な日本美術品を多数収集し、世界的な名声を博していた。戦時、スイスやオランダに隠されたこれらの美術品を展示するため、一九六〇年、イスラエル・ハイファに美術館が開設されたという。

若いころ骨董商をしていたという近所のおじさんの話は、どうやら本当だったのではないか。ヒットラー政権下のドイツへ、どんな密書を日本人に託したのだろう。見つければ銃殺ものではないか。おじさんはそんな冒険をした人なのだろうか。

おじさんもおばさんもとうの昔に故人になり、彼らの家は見知らぬ人たちの住むマンションになっている。最近ふと、イスラエルに行きティコティン美術館を訪ねてみようかと思った。子孫が健在しているそうである。おじさんの話をしたら、意外な事実が出てくるような気がする。

もり・みか 1942年生まれ、東京都出身。

著書に写真カタログ「ふりかえる人形」(チクマ秀版)、「漕ぎだす船 人形の旅」(里文出版)、「大野初子人形展 Beauty in Detail」(イギリス・セイন্ズヘリー日本文化研究所制作)など。



候補作品ご推薦のお願い

来年2月に依頼状を発送

来年度の第六十八回日本エッセイスト・クラブ賞の審査基準は下記のとおりです。本年四月一日から来年三月末日までに、初版として発行された単行本が対象です。来年二月に、会員および出版社に推薦願いをお送りしますので、候補作のご推薦をお願いします。

審査委員長は原田國男氏です。

今年度の日本エッセイスト・クラブ賞のご推薦は会員による推薦作品五点、出版社の推薦作品八一点、自費出版八点、合計一四〇点でした。

審査基準

一、二〇一九年四月一日より、二〇二〇年三月三十一日までの間に、初版として刊行された書籍とする。

二、クラブの正会員（個人会員）の作品、および共同著作は原則として審査の対象としない。ただし、入会の翌年度から五年以内に発表した作品は審査の対象とする。

三、著者の国籍は問わないが、日本語で書かれたもの。（翻訳は不可）

四、新聞、雑誌等に掲載され、その後出版されたものでもよい。

五、他の類似の賞を最近受賞されている方、およびすでに文名を広く知られている方の作品は除く。

六、随想、評論、ノンフィクション、伝記、研究、ドキュメント、旅行記など、エッセーを広い範囲でとらえ、特に新鮮で感銘を覚える新人の発掘に努める。

第六十八回日本エッセイスト・クラブ賞
審査委員長 原田 國男

例会

2019. 9. 24

現在の旅事情―旅で出会ったもの

ゲスト
旅行作家

秋山 秀一氏（会員）



私は小学生のころから、海外での人々の暮らしぶりや自然に興味を持っていた。小学生の時に、自宅近くの図書館に行き、海外の写真が載っている本を開いて、「こんな所に、こんな人たちが、こんな暮らしをしているのだ」と、食い入るように見ていたことを覚えている。初めての海外への旅は1975年にカナダに行ったことで、その後40年以上に亘って旅を続け、今年9月のバルト三国

への旅が、海外への旅、210回目だ。

例会ではそんな旅の途中で体験した、いろいろな話を紹介した。現在ロンドンの公共交通機関で使われているオイスターカードまでに至る間の、今では信じられないような券売機の話。ウズベキスタンでは今年の1月から駅構内での写真撮影が可能になった。日本人観光客のビザも不要で、入国審査もパスポートを提出するだけで、以前に比べ格段に楽になった。ミャンマーでは、右ハンドルの車は輸入禁止に。サンクトペテルブルクのデカプリスト広場が、元老院広場と名前が変わった、など、通りや広場の名称も変わる。日が長い夏至の日に、チャイコフスキーや

ドストエフスキーなどの墓巡りを楽しみ、サンクトペテルブルクの「モスクワ駅」からモスクワの「レニングラード駅」まで高速鉄道「サプサン」に乗って4時間の鉄道旅を楽しんだ話。

何かを叫びながら両手を天に伸ばして立っている、エディット・ピアフの銅像。まるで、「お控えなすって……」というような恰好の銅像。「もう我慢できない」というような恰好をしている男性が描かれているトイレの写真なども見てもらった。

旅に出ると、毎回、何かしら、「へー、そうなのだ」ということがある。この一年ほどの間に旅をしたマルタ、ヴィクトリアの滝、メキシコ、ニューカレドニア、ナイアガラ、ポルトガル、ドイツ、ウズベキスタン、ルーマニア、ブルガリア、ロシア、ミャンマー、バルト三国などを中心に、現在の旅事情について、ちょっとした話、面白い話を、プリントアウトした写真を見せながら紹介した。

「旅の達人が見た 世界観光事情」や「世界の道」など現在私が連載中の雑誌、読売新聞社発行のスペインに関するムック、朝日新聞に書いたリスボンの旅の記事、連載していた航空会社の機内誌など、さまざまな資料も会場に並べた。

当日会場に用意したのは、資料だけではなく。誤魔化すに、ひっかいた、ミャンマーの「ゴマ菓子」。赤・白・黄色、国旗の3色でデザインされたルーマニアのチョコレート、ブルガリア、エストニアのチョコレート。さらに、マルタ、ブルガリア、南アフリカのワインも登場。話だけでなく、ワインの味の違いも楽しみ、大いに盛り上った。

あきやま・しゅういち 1950年生まれ。江戸川区出身。東京教育大学（現・筑波大学）大学院修了。東京成徳大学教授等を経て、取材・執筆に専念。海外渡航歴は210回。訪れた国と地域はおよそ90カ所。著書に『ヨーロッパ観光事情 まち歩

きの楽しみ』『大人のまち歩き』『マレーシア』『スイス道紀行』『ウクライナとモルドバ』など。



（右上）まるで、「お控えなすって」と、仁義を切っているような恰好の銅像が…。ドイツ、アーヘン。



（左上）エストニア、タリン。煙突掃除人の銅像。



（左）フランス、パリ、20区。エディット・ピアフの銅像。その後ろに、バー・エディット・ピアフ。

例会
2019.10.29

相場の神々

―古代中国の富豪も説く「逆張り」―

ゲスト
相場師研究家

鍋島 高明 氏（会員）



昭和30年ころのこと。獅子文六の小説「大番」の主人公、牛ちゃん（モデルは佐藤和三郎合同証券社長）が「もはや相場師の時代ではない」と言って兜町を去って60年が過ぎました。個人の相場師に代わって投資信託、投資ファンドなど機関投資家が市場を支配する時代へと変貌していきますが、相場師が日本経済の近代化に貢献したことは動かせない事実だと思います。

リスクを冒して一獲千金を狙う相場師たちは賭博師としばしば混同されながらもたくましく生きてきました。彼らは儲けた金を社会に散財しました。あるいは公共的事業に投じたものです。富を独り占めした人は終わりが良くなかった。

私は昭和34年に日本経済新聞に入社以来相場にかかわってきました。編集局商品部というところに配属になり、現物相場の取材に当たりました。当時は問屋の力が強くて大問屋が集まる問屋街が現物市場を形成していました。蛸殻町（砂糖、陶磁器）、小網町（荒物雑貨）、木場（木材）、八丁堀（鉄鋼）、本所（鉄くず）、花川戸（履物）、堀留（呉服）、馬喰町（洋品）：大問屋が価格形成の主役で

したが、総合商社の力が強まるにつれ問屋街は力を失っていきます。生産財は商社が支配力を高め、一方の消費財は大手スーパーが価格決定権を握ります。こうして問屋街は崩壊していきます。

問屋街で取材記者のスタートを切ったものとしては問屋街の衰退は寂しいものでした。デスク、編集委員となっても書く対象物はやはり問屋街に絡むものでした。やがて相場師の足跡探しが始まります。ある業界雑誌に「相場師列伝」を書き始めたのは関連会社に出向していましたが。もう50歳を過ぎていました。

以来30年にわたって「相場師列伝」を描き続け取り上げた人は850人を越えそうです。かくなる上は「千人斬り」を目指そうかなどと冗談を言ってネタ探しです。

相場師のルーツをたどっていくと司馬遷「史記」の世界にたどり着きます。そこには「貨殖伝」、今日風に言うと富豪列伝が記されている。中国古代の富豪たちは「奇貨居くべし」

のことわざ通り、現在は価値がなくても将来値打ちの出そうなものを置いてその時に備えました。みんなが売りに出て安くなったところを買って進みました。そしてみんなが買って高くなったところで一斉に売り放ち巨利を占めました。

白圭「豊作の年には穀物を買集め、生糸や漆を売りに出す。繭が良くてきた年には絹や真綿を買集め、穀物を売りに出す。錢を増やそうと思えば安い穀物を買集め、欲望をこらえ衣服も質素にし、時機を逃がさぬことは猛獣やハヤブサがとびかかるようにする」。計然「高くなっていくときは土くれのように惜しげもなく放出し、安くなる時は真珠や硬玉と思って買い込む」。

また、古代中国を代表する女性の富豪は巴の国の清でしよう。先祖が水銀の鉱山を見つけてから何代にもわたって利益を独占し、非常な財産家でした。秦の皇帝は彼女の貞節を認め客分として扱ったそうです。

貨殖伝に登場の富豪たちは共通し

て「安くなったたら買い、高くなったら売れ」というのですが、これがなかなか厄介です。安いということは、みんなが売るから安い。そんな時敢然と買って出るのは勇気のいることです。

時は一気に飛んで明治時代、日本の近代史を彩る財閥の創始者たちは皆リスクに挑戦、新興財閥の代表格の安田善次郎は為替、通貨市場で礎を築きます。その戦法は貨殖伝の面々と同様、「人が見向きもしなくなると買い出動、みんなが買いだすと売り放つ」、いわゆる逆張り戦法で安田財閥の礎を築きました。

安田は「他人の僥倖をうらやむな」とも言っています。他人が大儲けした話に焼きもちを焼いて相場を張ることを「けなり売買」と言いますが、禁じ手のようです。また根津財閥の根津嘉一郎はぼろ株の中から可能性のある株を見つけ出し、経営努力で再建させていきます。根津は株はぼろ株買いですが、美術品は逸品買いに徹した。鑑識眼がなかったので専

門家の意見に従ったそうです。

日本の近代史を彩る相場師としては福沢桃介、山崎種二、田附政次郎、近藤信男、越後正一……数えられないくらいの相場師が東京なら兜町、蛸殻町、名古屋なら伊勢町、大阪は北浜（株）、堂島（米）、三品（糸）に蟠踞して市場の仕手（主役）として丁々発止の駆け引きを繰り広げた。彼らのようなりスクを恐れぬ経済人が市場の目抜き通りに帰ってくれば日本経済は活力を取り戻すことでしょう。

なべしま・たかはる 1936年

高知県出身、早大政経卒、日本経済新聞入社、商品市況取材のち、デスク、編集委員「鐘」「十字路」「中外時評」など各種コラムを執筆。日経産業消費研究所、日経総合販売を経て、定年退社後友人たちと市場経済研究所を設立、代表を務める。傍ら相場師研究にはまり、現在も日経新聞電子版、ヤフーニュース、株式新聞、米穀新聞などに執筆。近く「相場師全集」を出版予定。



四月にギリシヤ、マケドニアを取
材紀行。アクアポリスの大神殿、ア
レキサンダー大王の多くの銅像は印
象深いものでした。(広井 忠男)

七月下旬、孫と三泊四日の蓼科高
原への旅行に出かけた。涼しくて果
物、野菜が美味かった。甲府から奥
は車窓から休閒地が目立ち、そこ
にはソーラーパネルが一面に広がっ
ていた。農業の大型化、会社化をしな
いと食べ物が無くなってしまいうよう
な気がした。

休耕地ソーラーばかり鄙の夏

(斎藤 健)

事務局から

新会員の紹介

谷村 鯛夢(たにむら・たいむ)氏



俳人協会会
員。現代俳句協
会会員。婦人画
報社で各女性誌
の編集長を歴任
後、編集事業部長で退任。編集工房・
鯛夢を主宰。著書に『脳活俳句入門』
など。東京都在住。

新会員推薦のお願い

会員一名の推薦でも審査

日本エッセイスト・クラブの新会
員をご推薦ください。

クラブ定款第7条にありますよう
に、正会員となるには、現在の正会
員二名以上の推薦を得て、理事会の
承認を求めることになっています。

この「二名以上の推薦」という原
則は変わりませんが、会員一名の推
薦でも、理事会に申請していただ
ければ、審査の対象とします。理事
会推薦によって、規約の要件は十分
満たすことができます。

エッセイストの意味合いについて
は、狭義の随筆や随想だけにとら
われず、評論、ノンフィクションな
ど幅広い分野を対象にしています。著
書や新聞・雑誌などのお仕事を参
考に、クラブの趣旨に則して、理事
会で審査します。

クラブの活動は、クラブ賞の選定
のほか、年三回の会報発行、ゲスト
を招いての例会開催などがあります。
十月末現在の正会員は二九九名で
す。クラブの一層の活性化を図りた
く、会員各位の新会員ご推薦をお願
いいたします。

正会員の年会費は一万五千元。入
会金は不要。推薦、入会手続き等は
事務局にお問い合わせください。

(日本エッセイスト・クラブ理事会)

特別維持会費ご寄付のお礼

十一月五日までに、次の方々から
ご寄付をいただきました。ご芳志の
ほど、心からお礼申し上げます。

(順不同・敬称略)

藤原 作弥	渡辺 祥子	松本 仁一	降幡 賢一	荒井 保男	森脇 逸男	大高 英昭	内藤 啓子	大井 玄	鍋島 高明	永井 梓	安嶋 明	及川 直志	大槻 茂	萬年 浩雄	紺野 猷邦	柳川 時夫	村山 正則	今野 耕作	吉原 賢二	稲畑 汀子	秋岡 伸彦	中村 龍介	森 美可	町田 邦雄	渡辺 綱纜	原田 國男	穂苅 正臣	佐橋 慶女	長谷川 慶太郎	海老沢 小百合	大宅 映子	金子 光美	齋藤 健次郎	尾崎 左永子	戸田 淳子	中島 誠之助	吉行 和子
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	------	------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------	---------	---------	-------	-------	--------	--------	-------	--------	-------

市川 桃子	栗山 定幸	森 小夜子	森 孝之	森元喜美雄	脇 祐三	河合 弘之	関 千枝子	山本思外里	若林 滋	齋藤 健	坂口 和子	佐々木満里子	佐藤 幸子	蛭川 真夫	高島 肇久	田中洋之助	澤地 久枝	道脇 弘俊	川田 志明	梅津時比古	足立 則夫	樋口 恵子	秋山 秀一	井口 隆史	松田 宣子	戸田 桂太	松山 幸雄	春原 昭彦	山室 寛之	北野 栄三	富永 孝子	柳澤 桂子	小塩 節	山藤 章二	下重 暁子	佐田 智子	藤原 房子	又吉 國雄	中名生正昭	森本 雍子	中本 幹夫	並木きょう子	栗生 将信	河村 幹夫	栗田 亘	長屋 龍人	山口 仲美	遠藤 利男	後藤 多聞	森本 貞子
-------	-------	-------	------	-------	------	-------	-------	-------	------	------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------

小曾戸明子 畠山 重篤
匿名

会員からの寄贈著書

堤未果氏他著『支配の構造』
森 武生氏著『メスとバレットV』
坂口和子氏著『裸足の訪問』
榎本好宏氏著『歳時記ものがたり』
山室寛之氏著『1988年のパ・リーグ』
(八月から十一月上旬まで)

「自著紹介」のお願い

刊行から概ね一年以内を目安
に、ご著書の紹介を事務局あてに随
時、郵送、FAX、メール等でご送
稿ください。本文は著者名、書名は
別にして250字程度。本文とは
別に出版社・価格を付記願います。

二〇一九年度理事会報告

第二回理事会 (19年10月29日)

- ・ 会員の現況報告
- ・ 2019年度上半期収支報告
- ・ 新入会員の承認
- ・ 次号会報について

一般社団法人日本エッセイスト・クラブ定款

(抜粋)

第1章 総 則

(名称)

第1条 この法人は、一般社団法人日本エッセイスト・クラブと称する。

(目的)

第3条 当法人は、エッセイストの親睦をはかり、共通の利益を擁護し、言論の自由を主張し、文化と平和に貢献することを目的とし、国際文化団体との連携を期する。

(事業)

第4条 当法人は前条の目的を達するために下記の事業を行う。

1. 会員の相互協力
2. 国際文化交流
3. 研究調査の発表並びに講演、見学
4. 会員相互の親睦と相互扶助
5. クラブ賞の選定、その他必要な一切の事業

第2章 会 員

(種別)

第6条 当法人の会員は、次の5種とし、正会員をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律（以下「一般法人法」

という。）上の社員とする。

- (1) 正会員 当法人の目的に賛同して入会した個人
- (2) 法人会員 当法人の目的に賛同して入会した法人
- (3) 賛助会員 当法人の事業を賛助するため入会した個人又は団体
- (4) 名誉会員 当法人に特に功労があり、理事会で推薦され、会員総会で承認された者
- (5) 特別会員 当法人の正会員として20年以上継続した者又は当法人が主催するクラブ賞を受賞した者が満85歳になったとき

(入会)

第7条 正会員として入会しようとする者は、正会員2名以上の推薦を得、申込書に会費を添えて理事会の承認を受けなければならない。法人会員、賛助会員は理事会が推薦する。

第3章 会員総会

(構成)

第13条 会員総会は、すべての正会員をもって構成する。

2 前項の会員総会をもって一般法人法上の社員総会とする。
(会員総会)

第14条 当法人の会員総会は、定時会員総会及び臨時会員総会とし、定時会員総会は、毎事業年度の終了後3か月以内に開催し、臨時会員総会は必要に応じて開催する。全会員の5分の1以上が書面により請求したとき、または理事会が会議の目的事項を示して請求したときは、会長は臨時総会を招集し

第4章 役員等

役員名簿

第20条

(1) 理事 15 名以上 25 名以内

(2) 監事 2名以上

理事のうち、会長1名、理事長1名、専務理事1名、常務理事若干名、事務局長1名を推薦して理事会の決議によって、理事の中から定める。

会長及び理事長は、当法人を代表し、一般法人法上の代表理事とする。

第5章 理事会

第28条

理事会は、次の職務を行う。

(1) 当法人の業務執行の決定

(2) 理事の職務の執行の監督

(3) 会長、理事長、専務理事及び常務理事の選定及び解職

第6章 計算(略)

第7章 清算(略)

第8章 附則（略）

– 39 –

会 員 名

(2019年11月1日現在 299名)

五十音順

あ行

阿川 佐和子	阿部 菜穂子	青木 賢児	秋尾 沙戸子	秋岡 伸彦
秋田 博	秋山 秀一	芥川 喜好	浅川 港	甘里 君香
荒井 保男	足立 則夫	荒木 裕志	有馬 真喜子	五十嵐 佳子
井口 隆史	井上 卓衛	池内 紀昭	池谷 薫	伊野 啓三郎
飯塚 恆雄	飯塚 浩彦	石原 美光	市川 桃子	市田 隆文
稲畑 汀子	猪熊 建夫	上田 篤	上田 良一	上野 創
白井 和恵	白田 信行	鶴飼 哲夫	碓井 彊	内池 正名
内田 洋子	梅津 時比古	浦田 憲治	海老沢 小百合	榎本 好宏
遠藤 利男	小川 津根子	小倉 董子	小澤 秀雄	小塩 節
小曾 戸明子	尾崎 左永子	尾崎 俊介	及川 直志	大井 玄
大塚 義治	大岩 孝平	大城 浩詩	大空 博	大平 常元
大高 英昭	大谷 克弥	大槻 茂	大村 智	大宅 映子
太田 愛人	岡 佳津子	岡島 成行	岡田 直敏	岡本 厚
奥山 俊宏				

か行

加藤 恭子	加藤 貞仁	柏 澄子	勝方 信一	金森 敦子
金子 光美	亀田 泰武	河合 弘之	川田 志明	川良 浩和
河村 幹夫	木田 幸紀	北原 歌子	城山 邦紀	儀同 保
菊澤 研一	岸 恵子	岸本 康	北野 栄三	久我 なつみ
久谷 興四郎	轡田 隆史	国正 武重	倉部 行雄	倉本 宗剛
栗生 將信	栗田 亘	栗山 定幸	黒川 鍾信	古庄 ゆき子
小池 光	小谷 瑞穂子	小林 和男	小松 浩	児島 宏子
後藤 多聞	後藤 秀機	今野 耕作	紺野 猷邦	

さ行

佐々木 健一	佐々木 卓	佐々木 満里子	佐田 智子	佐藤 きむ
佐藤 幸子	佐橋 慶女	佐保田 芳訓	斎藤 勇	齋藤 健
齋藤 健次郎	齋藤 博康	柴門 ふみ	坂口 和子	坂本 弘道
澤口 たまみ	澤地 久枝	澤藤 範次郎	三宮 麻由子	志村 ふくみ
塩谷 靖子	篠田 桃紅	下重 暁子	下村 満子	杉江 弘
杉溪 一言	杉戸 大作	杉山 武子	鈴木 博	砂原 和雄
関 千枝子	関戸 祐守			

た行

田熊 清彦	田中 充子	田中 トモミ	田中 伸尚	田中 秀一
田中 實	田中 洋之助	田沼 敦子	田村 秀敏	田谷 麗子
田和 潤子	高井 潔司	高木 徹	高榎 堯	高階 經和
高島 肇久	高橋 祥友	高村 壽一	竹内 一正	竹中 淑子
武内 寛	武本 宏一	谷地 快一	谷村 鯛夢	俵 万智
柘野 健次	辻 由美	堤 未果	鶴ヶ谷 真一	D・ゾペティ
出久根 達郎	ドリアン 助川	戸田 桂太	戸田 淳子	鳥羽 欽一郎
東畑 朝子	当銘 貞夫	徳田 正幸	富永 孝子	富山 和子
鳥海 修				

な行

内藤 啓子	内藤 洋子	中井 幸一	中島 さおり	中島 誠之助
中野 利子	中名 生正昭	中丸 美繪	中村 登紀夫	中村 政雄
中村 龍介	中山 士朗	永井 梓	長井 好弘	長田 亮一
長友 佐波子	長屋 龍人	鍋島 高明	並木 きょう子	新妻 義輔
二宮 正之	蜷川 真夫	縫田 曄子	野見山 曉治	

は行

葉山 美知子	羽中 田 昌	畑 正憲	畠山 重篤	濱邊 祐一
原 彬久	原田 國男	林 望	春原 昭彦	早河 洋
樋口 恵子	広井 忠男	深尾 凱子	福嶋 武	福田 章
福田 はるか	福原 義春	藤原 勇彦	藤原 作弥	藤原 房子
藤原 正彦	船木 拓生	降幡 賢一	古川 洽次	古川 浩
別役 実	穂苅 正臣	細川 俊夫	堀内 丸恵	堀尾 真紀子

ま行

牧 久	牧村 健一郎	又吉 國雄	町田 邦雄	松田 宣子
松原 眞樹	松村 満美子	松本 仁一	松山 幸雄	萬年 浩雄
三島 利徳	水谷 亨	道川 文夫	道脇 弘俊	南 砂
宮本 倫好	宮崎 佳代子	村尾 清一	村松 賢一	村山 正則
望月 照彦	桃井 恒和	森 小夜子	森 孝之	森 武生
森 哲志	森 美可	森永 公紀	森本 貞子	森本 雍子
森元 喜美雄	森脇 逸男			

や行

八百板 洋子	八木 恭平	八木 美雄	矢吹 清人	安嶋 明
--------	-------	-------	-------	------

柳生 尚志	柳澤嘉一郎	柳澤 桂子	柳川 時夫	山川 静夫
山形 孝夫	山岸 健	山口 寿一	山口 仲美	山下 健
山藤 章二	山室 寛之	山本 一生	山本思外里	山本 博文
よしだみどり	養老 孟司	横山 昭作	吉野源太郎	山本 賢二
吉行 和子				

わ行

和田 亮介	若林 滋	脇 祐三	渡瀬 昌彦	渡辺 祥子
渡辺 綱纜	渡辺 雅隆	渡辺美佐子	渡邊 満子	

法人会員（順不同）

朝日新聞社	岩波書店
毎日新聞社	講談社
読売新聞社	NHK 出版
産業経済新聞社	KADOKAWA
日本経済新聞社	集英社
中日新聞社	日本民放クラブ
共同通信社	
日本放送協会	
TBS テレビ	
テレビ朝日	

日本エッセイスト・クラブ事務局



日本エッセイスト・クラブ

会報 二〇一九冬 (No.71Ⅱ)

二〇一九年十一月二十八日 発行

発行人 遠藤利男

発行所 一般社団法人 日本エッセイスト・クラブ

東京都港区新橋一〇五〇〇四

明宏ビル別館六階 〒一〇五〇〇〇四

電話 〇三(三三)五〇二七二八七

FAX 〇三(三三)五〇二七二八八

ホームページ <http://essayistclub.jp/>

Eメール info@essayistclub.jp

印刷所 (株)TBSプロウデア

古今東西の名著、その核心を読み解く——。大好評の愛蔵版！

NHK「100分de名著」ブックス

定価：本体 各1,000円+税(★は定価：本体1,300円+税) *各四六判 並製

ドラッカー マネジメント	上田惇生
孔子 論語	佐久協
ニーチェ ツアトラウストラ	西研
福沢諭吉 学問のすゝめ	齋藤孝
アラン 幸福論	合田正人
宮沢賢治 銀河鉄道の夜	ロジャー・パールバス
ブッダ 真理のことば	佐々木閑
マキャベリ 君主論	武田好
兼好法師 徒然草	荻野文子
新渡戸稲造 武士道	山本博文
パスカル パンセ	鹿島茂
鴨長明 方丈記	小林一彦
フランクル 夜と霧	諸富祥彦
サン・テグジュペリ 星の王子さま	水本弘文
般若心経	佐々木閑
アインシュタイン 相対性理論	佐藤勝彦
夏目漱石 こころ	姜尚中
古事記	三浦佑之

松尾芭蕉 おくのほそ道	長谷川 耀
世阿弥 風姿花伝	土屋恵一郎
万葉集	佐佐木幸綱
清少納言 枕草子	山口仲美
紫式部 源氏物語	三田村雅子
柳田国男 遠野物語	石井正己
ブッダ 最期のことば	佐々木閑
莊子	玄侑宗久
岡倉天心 茶の本	大久保喬樹
小泉八雲 日本の面影	池田雅之
良寛詩歌集	中野東禪
ルソー エミール	西研
内村鑑三 代表的日本人	若松英輔
アドラー 人生の意味の心理学	岸見一郎
道元 正法眼蔵	ひろさちや
石牟礼道子 苦海浄土	若松英輔
歎異抄	釈 徹宗
ユゴー ノートルダム・ド・パリ 大聖堂物語	鹿島茂

ne
CLUB